
守り人

ぱるひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守り人

【Nコード】

N 8 2 4 4 A

【作者名】

ぱるひこ

【あらすじ】

マルキス国の姫、マルキス・レイアとその世話役の老人、ラクト・モーザ。二人が旅の途中、正体不明の敵の襲撃に遭ってしまう。絶体絶命のピンチを救い出した謎の旅人アグニ。その力を認めたモーザはアグニに用心棒を頼む事にした。そこから危険な旅が始まるのだった！！

第一話・救いの矢

荒野を一台の馬車が駆けていた。中には気品溢れる少女と威厳のある老人が乗っていた。

「姫君、申し訳ありません」

老人が深々と少女に頭を下げた。

少女はマルキス国国王、マルキス・オクトの次女、マルキス・レイア姫。老人の方は姫の世話役、ラクト・モーザ。

「良いのですモーザ。私一人が犠牲になるだけで国が救われるのですから」

ニコリと笑ったが、その目には悲しみの色が見えた。

「モーザ様。もうすぐ国境です」

馬車を走らせている従者が声を掛けてきた。

「そうか。越えたら少し休もう」

はいと短い返事が返ってきた。

それからしばらく走ると、突然従者が叫んだ。

「姫様！モーザ様！」

何事かと思いい外を覗こうとすると、馬車が突然横転した。

ガタガタ！

レイアをかばうひまも無かった。

「姫！大丈夫ですか！」

すぐに起き上がり辺りを見回した。横でレイアがぐったりと倒れているのを見つけた。

「姫！」

どうやら頭を打って気絶しただけのようだ。

「良かった・・・」

しかしホッとしたのも束の間、バツと幕が開けられると、武装した兵士が数人、姿を表した。

「マルキス・レイア姫と、その世話人のラクト・モーザだな」

「だったらどうだというのだ！」

凄んでみたが、武装した兵士相手にどうする事もできない。無言でレイアと共に馬車の外に引きずり出された。

「やめろ！やめないか！」

モーザがレイアに覆い被さるようにした。

「貴様らにはここで死んでもらう」

そう言うのと剣を高く振りかざした。

死んだ。

と思い目をつぶったが、何時までも剣が振り降ろされない。恐る恐る目を開くと、兵士が苦悶の表情を浮かべていた。背中には矢が刺さっている。

「ジジイと嬢ちゃんを殺すにしちゃ、随分大袈裟だな」

兵士達の後ろの方に弓を構えた男が立っているのが見えた。

「なんだ貴様！」

兵士達がそつちを向いた。

「ただの旅人だよ」

クツクツクツと小馬鹿にした笑いをしながら言った。

「殺せ！！」

顔を真っ赤にしながら指揮官らしき男が叫んだ。兵士六人が武器を片手に突っ込んで行く。

それを見た男はゆっくりとした動作で弓に矢をつがえた。

ヒュツと風を切る音と共に矢が飛んでいき、一人の喉元にグチュと刺さった。

男は段々と近付いて来る兵士達に焦りもせず、またゆっくりと矢を放った。

今度は顔の中心にカツツと刺さった。

さすがに弓を使う距離では無くなると、腰に差していた剣をサツと抜いた。

そして、正面から突いてきた槍を避けると、その兵士を真っ二つに割った。

そのまま体を回転させると、左で剣を構えていた兵士の腹を横に切った。流れるような剣捌きに怯んだのか、残りの兵士の動きが一瞬止まった。

その隙を逃すはずも無く、一気に距離を詰めると残った二人を切りふせた。

その時の顔は子供のような笑顔だった。

「う、動くな！くそっ、この化け物が」

指揮官がレイアに剣を突き付けた。

「剣を捨てる！じゃないとこいつらを殺す！」
顔が青ざめている。

「殺すって・・・元々殺す気だったろうが。まあいいや」

クツクツと笑いながら剣を投げ捨てた。指揮官はそれを見て安心したのか、突き付けていた剣を少し下にずらした。

その時、男がニヤツと笑ったような気がした。

「うわー！」

叫び声が聞こえたかと思うと、指揮官の後ろから誰かが飛び掛かっていった。

よく見ると血塗れになった従者だ。

「くっ！貴様！」

振りほどくと、従者の胸に剣を突き立てた。

「ぐっ！」

従者と指揮官の声が重なった。

何事かと思ったが、すぐに理解できた。

いつの間にか指揮官の背中に矢が突き刺さっていた。

「油断するからだ」

男がいつの間にか弓を構えていた。

「ジジイ達大丈夫か？」

剣を拾いながら尋ねてきた。

「かたじけない。お陰で助かった。そなたは？」

「アグニ。そっちの嬢ちゃんは大丈夫か？」

「少し頭を打ってしまったようだ。心配ない」

まだ目を覚まさない。

「この少し先に町がある。そこまで連れて行ってやるう」

そう言うとはるかに向かって何か叫んだ。

すると、何処に隠れていたのか一台の馬車がこちらに走って来た。

「貴族を乗せるような物じゃないが我慢してくれ」

アグニが恥ずかしそうに笑った。馬車は子供が走らせているようだ。

「さあどうぞ」

アグニに促され、モーザがレイアを背負って乗ると、すぐに出発した。

第二話・頼む！

「あんた達の名前は？」

「申し遅れた。私はモーザ。こちらは私の主人の娘のレイア様です」
レイアの名前を聞くと、アグニが少し怪訝な顔をした。

「レイア？何処かで聞いたような・・・」

「それより、アグニ殿はマルキスの生まれですか？」
まずいと思い、モーザが話題を切り換えてきた。

「いや、オクドウルだ。今は世界中を旅している」

「ほう、それは大変ですな」

「ははっ。あんた達程じゃないよ」

談笑していると、外から声が聞こえてきた。

「もう着きますよ」

さっきの子供だ。

「彼は？」

「んっ？ああ、あいつはツキメ。色々あって一緒に旅してる。それに彼じゃなくて彼女ね」

そんな雑談をしていると馬車が止まった。

「ツキメ。矢と食料買って積んどけ」

指示をすると、はい。と返事し、町の中に消えていった。

「さて、宿を探すか」

「かたじけない」

「いいって」

そう言うアグニがレイアを背負って歩いて行った。

宿はすぐに見つかったが、何処も満室になっていた。

「一室だけ空いてますが、とても貴族の方をお泊めするような部屋じゃ」

「いい。少し休むだけだ」

やつと五つ目の宿で見つかった。

「それでしたらご案内致します」

案内され部屋に入ると、確かに貴族が耐えられるような部屋では無かった。一応掃除はされているようだが、汚い。さいわい、シーツはきれいだったお陰で、取りあえずレイアをベッドに寝かせる事はできた。

「さて、さっきの説明をしてもらおうか？」

イスに座ると早速アグニが聞いてきた。

「すまないがこちらにも事情がある。聞かんでくれないか」

「・・・ま、良いけど」

沈黙が流れた。

「アグニ殿、頼む。我々を首都のタイロまで連れて行ってくれないか？」

突然モーザが頭を下げた。

「・・・さっきは殺されそうだったから助けたが、用心棒はやっていない」

冷たい言い方だった。

「頼む！何としてでも行かないといけないのだ」

モーザが床に頭をつけて頼んできた。

「・・・うつ・・・うつ」

その時、レイアが目覚めた。

「おお、起きられましたか」

モーザが立ち上がり駆け寄った。

「モーザ。・・・貴方は？」

レイアがアグニに気付き尋ねてきた。

「こちらの方は先程助けて下さった方でございます」

モーザがさっきの事を簡単にレイアに説明した。

「そうでしたか。ありがとうございます」

説明を聞き終わると、レイアがアグニに向かって深々と頭を下げた。

「勿体ない。貴族が平民に簡単に頭を下げるべきじゃない」

アグニが諭した。

「いえ、命の恩人に貴族も平民もありません」

「なかなかしっかりしている。流石マルキス国の姫様だ」

「知っていたのか!？」

モーザが驚いた表情を見せた。

「まあ一応ね」

「知っているのなら尚更頼む！タイロまで守ってくれぬか」

「私からもお頼み申し上げます」

モーザとレイアが頭を下げた。

「うーん。姫様の頼みを断るわけにもいかないか。ただし、それなりの礼は払って貰うぞ」

二人共その言葉に嬉しそうな顔をした。

「かたじけない」

「それと、旅の最中は俺の言う事を聞いてもらう。いいな？」

「わかっています」

レイアが答えた。

「それじゃさつさと出発するぞ」

アグニがさつさと部屋から出て行くとした。

「もう行くのか？」

モーザが戸惑ったような表情を見せた。

「当たり前だ。奴等の仲間がいるかもしれないだろ。捕まりたいのか」

厳しい言い方だが、アグニが正しかった。既に町には不穏な影がうごめいていた。

フードの付いた白いマントに身を包んだ三人組が、アグニの馬車を囲みながら話をしていた。

「ここにいるはずだ。探せ。姫以外に用は無い。殺せ」

中心の男が指示すると、他の二人が散っていった。

第三話・罇

アグニ達三人は平民の格好をして、町中を隠れるようにしながら歩いていた。貴族の格好だと町中では目立ってしまふ。

「……」

レイアにとっては見聞きする物すべてが新鮮なようで、辺りをキョロキョロ見回しながら歩いている。

「レイア。あまりキョロキョロするな。目立つぞ」

アグニに注意されると、レイアが恥ずかしそうに首をすばめた。

「アグニ殿！ 姫を呼び捨てにするとは！」

モーザが顔を真っ赤にした。

「ジジイ、さっきも言っただろ。俺とレイアは兄弟で、ジジイの孫って事にするって」

アグニが面倒臭そうに説明した。

「だが！」

「別に良いんだぜ？ 従えないなら」

少し脅してみた。モーザが黙ってしまった。

「おじいさま。良いじゃないですか」

レイアが仲介した。この状況を楽しんでいるようだった。

「……わかりました。私もできるだけ努めます……」

モーザを納得させると、アグニは満足そうに笑った。

その時、後ろからゾクツとするほど殺気をはらんだ視線を感じとった。この中でそれに気付けたのはアグニだけだ。

「……」

「お兄様。どうかしましたか？」

突然表情を変え、黙り込んだアグニをレイアが心配そうに覗き込んだ。

「……恐らく追っ手に見つかった」

『えっ！？』

いきなり言われた二人は大きな声を出してしまった。

「騒ぐな」

そんなレイアとモーザをアグニが諫めた。

「ジジイ、すぐに馬車に戻れ。ツキメがいるはずだ。そのまま少し離れた所に逃げろ」

「アグニは？」

「追っ手を何とかする。早く行け」

そう言うのと剣の柄に軽く手を掛けた。

「・・・」

レイアがアグニを心配そうな目で見てくる。

「レイア、大丈夫だ。早く行け」

その視線に気付いたアグニが優しく言った。

「・・・御無事で」

そう言い残すと、モーザと共に走り去って行った。

それを見送ったアグニは急に後ろを振り向き、ダツと突っ込んでいった。そのままシャツと剣を抜くと、白いマントを着た奴に切りかかった。

ガチッーン！

金属同士がぶつかりあう音が辺りに響き渡る。

「うわ~~~~！」

「きゃあ~~~~！」

切り合いに気付いた周りの人達が、叫び声をあげながら散っていった。

不意打ちを防がれたアグニは後ろに数歩下がって間合いを取った。それを見ると、白マントが剣を構え、ジリッ、ジリッと間合いを詰めてくる。

しばらく睨み合いが続いた。そして、しばらくそれが続くと、まるで合わせたかのように二人が同時に地を蹴った。

ちょうど真ん中ぐらいの位置で二人が交差し、逆の位置になると、パキッという金属の折れるような音が後ろから聞こえてきた。

「ふ」

息を大きく吐きながらアグニが振り向くと、白マントの剣が折れ、地面に突き刺さっていた。

「クツクツクツ」

突然白マントが肩を震わせ笑いだした。

「何がおかしい」

アグニが怪訝な表情をした。

「私の任務はお前を引きつける事。既に任務は完了している」

「まさか・・・」

嫌な予感がした。

アグニは白マントを無視し、横を弾けるように走り抜けた。

「逃がさん！」

白マントがそう叫ぶと、先の折れた剣をアグニの背中目掛けて力一杯投げ付けた。

「くっ！」

間一髪でそれを躲したが、白マントはその間に一気にアグニとの距離を詰めてきた。そして、そのままアグニのみぞおちに拳を叩き込むと、上に飛び上がり、顔面に蹴りを仕掛けてきた。

アグニは屈んで蹴りを躲すと、剣をパツと放し、白マントの脇腹を思い切り殴りつけた。

「カハッ！」

空気の漏れる音をだしながら、小柄な体が横に吹っ飛んでいく。

「クソッ・・・」

アグニはそれに目もくれず、馬車に向かって走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8244a/>

守り人

2011年1月8日22時21分発行